貧困研究（まとめ）・貧困と不平等

（貧困・不平等の定義）

１．絶対的貧困について：20 世紀の初頭、その論者の視点よりとらえ方がさまざまになりうる「貧困」という概念について、「貧困線」という低所得のラインを設定した上で、その所得を下回る生活状態を貧困とする「貧困」、「貧困概念」が定義された。

当時の「貧困線」とは、「生物学的生存を脅かす」程度の生活財（食料等）の不足をもたらす低所得額であり、この貧困線が絶対的貧困線とされた。しかし絶対的と形容とされながらも、この所得額は、男女、個人差、またそれぞれの社会の食糧等生活財の交換システムの動向、歴史的、地理的、社会文化的な条件によって、変動を免れる事の出来ないライン（所得額）と言わねばならない。そこで絶対的貧困は絶対的と形容されながらも、相対性を完全には払拭できない概念構成と言わねばならないといえよう。

２．相対的貧困について：やがて第二次大戦の戦後復興なった 1970 年代、「その社会で当然とみなされている生活様式、習慣、社会的諸活動から事実上締め出されて（deprived）いる」とする「剥奪(deprivation)」という概念によって、輪郭を明らかにされたのが相対的貧困である。「剥奪」とは食糧、住居等生活財の剥奪といった物質的欠乏と、それに伴う心的な剥奪感が一体となった状態と考えられ、社会の一般的、平均的水準を示す所得額（相対的貧困線）を下回る生活状態である。OECD（経済協力開発機構）では、「等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人数の平方根で割 って算出）が全人口の中央値の半分」の所得を相対的貧困線として、これ未満の世帯員を相対的貧困者と定義している。

> ※可処分所得（かしょぶんしょとく）：収入のうち、税金や社会保険料などを除いた所得で、自分で自由に使える手取り収入。 給与所得者の場合は、「給与収入金額―（社会保険料＋所得税・住民税の額)」がこれに当たる。

３．不平等概念について：その社会内の人間生活の重要な要素、（たとえば所得額）において、その社会内でのばらつきが大きい場合に、その社会状態、「ばらつきの様態」が階層固定的な社会状態を「不平等」として、不平等概念が定義されている。

しかしこの「不平等」は、その社会の平均値や基準値をどのラインに置くのか、そしてその基準値的な水準、比較する他者との関係において、どの程度のマイナスの逸脱にある人々が、どの様なばらつき（階層関係の動向）をもって生活しているのか、その様態、程度により、不平等の度合い、評価が異なる概念として現れる。

そこで不平等概念は、比較する他者との関係によって浮かび上がる関係的な概念であり、比較する他者、参照集団をどこに置くかによって評価が異なり、さらに生活財の交換権限、

各種人権、自由の平等などと、何の平等を問題にして不平等を論じるのかによって、その評価、議論の範囲も異なるという、相対性を抱えた概念と言わねばならない。そのため、社会内の階層構造を反映する不平等概念は、社会科学の概念としては相対性を免れ得ない概念構成ともされて、「懐疑主義につながる要素[1]」を有するとの指摘もなされている。

３－１　人間の社会文化的ニーズと不平等：ところで文化人類学の側では、レヴィ＝ストロースの言説として、人間を自然的生物学的な状態から、集団を形成して生きる社会文化的な状態へと移行しつつある存在とする視点が生まれている。人間は今となっては社会と言う箍（たが）の内側での生活様式を生きる、社会集団の中で生活財、婚姻の相手、各情報を求めあい、集団の中に自らの命、子孫、種の存続を託する存在として、そうした生存様式、生活財取得の社会的ルールにおいて、社会文化的に自らの生存を果たしていると言えよう。

この人間の自然生物から社会文化への移行という規定性を受け入れるならば、文化状態に移行して生きる人間存在、集団、あるいは社会という箍の中での規律、集団内の社会文化的な要請の中での生を営む存在が人間であると言わざるを得ない。その始まりにおいては、集団内、集団間の規律は、各生物学的生命の維持、そして種の継承のための求めあいとして、互いに互酬的な規律が求められざるを得なかったと考えられよう。

そこで人間の生存、命の継承のための要求は、人間の存在様式、消える事のない響きとしての生物学的な存在として、社会文化状態を生きる人間の生活の維持のための諸要求として、生活の継続に係る諸要請事項の集合を、社会文化的に満たす他はないと言わざるを得ない。そこで人間の生活要求（生活ニーズ）は、生物的要求、食料の分かち合いをベースにしつつ、人間の文化状態からの要求、人間の象徴機能、観念作用が産み出した文化的な事象すべてに広がり、有形無形を問わず、集団関係の維持に係るすべてに及ぶと言うべきであろう。

それは集団内での生活財の交換権限を含みつつ、社会集団内での集団参画上の権能に係り、有形、無形の文化時事象についての、その互酬的、平等な分かち合い、そうした社会的要求として、文化状態の深まりとともに広がりつつ、表れていると考えられよう。

しかしながら、やがて集団や社会の内部での互酬性や平等性について、生活物資、食料の調達関係の齟齬、変化が表れる場面において、さまざまな互酬性の齟齬、優劣関係が生じる場面が現れて、これに直面する人々において、生命維持の要求、生活財への平等要求とともに心理社会的な要求、平等願望が生じて、それが満たされない場面に対峙する人々において、個人における憂鬱、心理的な衰弱、剥奪感が生じるものと思われる。それらを根拠にして、文化状態を生きる人間なればこそ、差異を識別する人間なればこそ、人間に特有な生活ニーズ、社会文化的な二―ズ、その不充足である不平等問題が感じられ、表れたと考えられよう。

[1] 藤村正之『貧困・不平等と社会福祉』P23　有斐閣　1997 年 4 月 20 日

３－２　**新しい貧困（剥奪・排除）と不平等**：人間の生活はいまや、食料の調達、生活資源の調達をベースに、家族、親族、地域、そして労働市場や財市場との係り合いの中にあり、社会という箍（たが）、その内側の構造を形成する社会関係性を抜きに、その全体像を捉える事は出来ない。人間存在は、さまざまな社会関係の場面で、生活財調達上の劣勢、さらには社会的活動上の劣勢に向き合う場面で、差異を識別する人間なればこそ、社会関係的側面での平等な分かち合い、互酬的な交流関係の要求を抱えると考えられよう。

さまざまな生活場面での、さまざまなマイナスの逸脱状態は、社会文化的要求を生じて、その欠乏が今や新しい貧困として捉えられていると考えられる。貧困概念は所得の不平等問題である絶対的貧困から、今や生活の全分野にわたる、その時代の多様な生活ニーズの窮乏の集合、心理的剥奪を抱える不平等問題と同値である相対的剥奪、あるいはその社会における重要な社会関係的な劣勢、社会関係的な疎外、排除の様態を「排除」として焦点化する新しい貧困（社会的排除）が提示されている。新しい貧困と不平等問題とは同値といえよう。

３－３　**厚生経済学的な不平等へのアプローチ**：

※厚生経済学：（welfare economics）（厚生：人間の心理的な満足感）

「厚生経済学は功利主義の伝統を受けついで，社会のすべての人々の効用の総和を最大にすることが経済政策の目標であるとみる立場から，生産の効率化と分配の平等化のための諸政策を論じている。おもな内容は，(1)福祉と国民所得との関係，(2)資源配分の効率化のための政策，(3)分配の平等化が国民所得の大きさに及ぼす影響など。」とされる。

厚生概念については、「A.C.ピグ―の『厚生経済学』1920 年の表題に従った「厚生」概念であり、個人の「厚生」の総和を経済厚生とする操作の背後にある，個人間の効用を比較できるという判断について、できるだけ受け入れられやすい価値判断だけに基づいて，経済厚生の最大化を考えるのが新厚生経済学である。他の人の効用を減ずることなしには，だれの効用をも増加しえない状態を最適とする基準を採用するものであり，この結果所得分配の問題が切り離され，資源配分の問題だけが取り扱われることになった」（世界大百科事典より）との解説もある。

厚生経済学的に不平等にアプローチをする社会的厚生関数として、所得分布を媒介とする集団間の不平等度を比較しようとする不平等測度が開発されている。しかし最も多用されているジニ係数を含め、すべての社会の不平等の優劣をつける事ができる「完備的な測度」は特定できない。

この事はたとえば所得分布における不平等測定においては、その評価に影響を与える人口規模、平均所得、所得のばらつき、社会的権能の偏りの様態などと、不平等を左右する要

因が複数存在し、それらが相互に動きあって不平等度に影響を及ぼしており、そこで新たな要因が生じ、吸収されるといった社会的な動き、所得分布の変動、その特徴や各要因間の相互作用の影響などと、不平等測定はその要因との関係で動きつつある問題事象として表れるといえよう。

言い換えると不平等概念は、その社会の所得分布のみに注目するアプローチにおいてさえも、変化しつつある多様な要因（所得の平均値、最大値、最低値、人口等）の相互作用の結果として、それぞれの視点によって異なる結果をひきだし、各要因の影響を一つの測度で積算する事に困難を呈する概念といえよう。不平等は、現在も新たな構成要因が生じ、あるいは消滅しつつ、構築されつつある、動きつつある社会状態と言わねばならないのであろう。

４．　貧困と不平等の関係（厚生経済学的な貧困へのアプローチをふまえて）：

各社会の貧困度を測定する社会的厚生関数である貧困測度（指標）の中で、「1970 年代から 80 年代前半に集中的に用いられた[2]」というセン測度(1973 年)、その改良型である「近年とりわけ幅広い支持を得ている」という FGT 指標群は、不平等の計測（ジニ係数）を抱えこんでいる貧困測度（指数）である。

このセン測度の改良系がさまざまに開発されたが、やがて完備的な測度を開発する事ができず、**「準順序」**といったタームを生み出している。この事は貧困は不平等問題を内包しており、貧困と不平等は互いに影響しあう概念であること、そして貧困の中の不平等は、所得情報で捉えきれない要因を含んで動きつつある概念であり、階層構造の変化をも含む概念として理解される。

４－１**「準順序」について**：厚生経済学の領域では、貧困と不平等の関係についての数理な研究が、セン測度開発以後の「分布感応的な貧困測度」、FGT 指標群の膨大な研究として行われたという。これらの研究は結局貧困を測る完備的な測度、各社会の貧困度を比較して順位づける事ができる測度は特定不可能であるところから、この結果を踏まえてアマルティア・センは、貧困測定において柔らかい順序関係、「準順序」を導いている。

「準順序」とは各社会、各集団の間の貧困度、不平等度の優劣を明確に示すという、いわば数直線上に順を追って一列に並べようとする試みが不可能であるために、柔らかい順序付けをもって各社会の不平等度、貧困度を順位づけようとするものである。この順序は優劣、同等が明確（完備性、推移性を満たす）なものではないが、幅のある緩やかな順序関係、「少なくても同程度に不平等」を含む順序関係としての**「準順序」**である。

所得分布と言う切り口で構成する社会的厚生関数としての貧困測度、不平等測度におい

[2] 絵所秀紀　山崎幸治編著　『アマルティア・センの世界―経学と開発研究の架橋―　』P86　晃洋書房　2005 年 2 月 25 日

ては、この所得を媒介にする関数という限定的とも言えるアプローチにおいては、各集団間の不平等評価を比較することができる完備的な測度は、特定不可能である事が明らかにされ、このことは貧困も、不平等も柔らかい順位付け「準順位」によってしか比較できない社会問題であり、その事は不平等概念であっても、不平等を抱えている貧困概念であっても、貧困線や均等分割線という「比較する他者」との関係において構成される概念、社会状態であり、それは現在的に構築されつつある動態的な状態として、関係的な概念として理解せざるを得ないといえよう。

言い換えれば、不平等測度を抱えている貧困測度が多用されざるを得ない事実の示すところは、貧困概念は不平等概念を内包する概念であり、貧困も不平等も「準順序」によってしかその優劣が特定できない、貧困線や均等分割線といった変動する比較する他者との関係によって概念枠を括るところの、動態的、相対的な概念であるという事であろう。

４－２　**「エンタイトルメント(権限)・アプローチ」について**：絶対的貧困線と相対的貧困線の逆転現象が起こる、飢饉、飢餓の蔓延する社会状況がたびたび生起する時代の中で、アマルティア・センは食料の調達のための「権原」と言う視点、社会システム論的で、動態的なアプローチ、「飢饉への権限（エンタイトルメント）・アプローチ」を開発して、飢餓、飢饉の発生の機序、原因の解明にあたっている。

このアプローチは、飢饉の発生の要因と結果の検討における焦点を、食料の絶対的な欠乏ではなく、その地域での食料の供給状況、供給の不足－FDA（Food Availability Decline）と言った、その社会内で食料を獲得、調達する個人の社会関係、社会的権能、権限の偏り具合へと視点を移して解析するものである。このアプローチの有効性が示すところは、生物学的生存を脅かす絶対的貧困でさえもが、その極限的に厳しい状態、飢饉などの場合においても、貧困は社会的権能の偏り、社会文化的な要因に規定されているという事実であろう。

社会文化的要因の偏り、社会文化的な生活ニーズの不充足とは、不平等問題そのものと言わざるを得ず、生物学的生命を脅かす絶対的貧困さえもが、社会文化的要因、食料調達権原における不平等の構造に従い、不平等問題の結果集合として検討され、顕かにされる社会状態として理解されるといえよう。

４－３　**貧困測定における多軸調査の意味あい**：ところでＥＵ（欧州共同体）では欧州 2020 戦略に合意して社会経済の改革を進めているが、その EU の貧困調査の動向は、一つあるいは複数の貧困測度によらず、伝統的な貧困測定を含みつつ、生活条件全般、多次元的な生活実態調査、社会調査、その多軸項目の相互関連性の評価へと向かっている。この事は新しい貧困、社会的排除という不平等問題は、その問題となる生活領域、対象領目の無限定的な

広がりを示していると考えられ、社会文化的要求の人間生活に於ける広がりの全方位性、重層性を反映していると考えられよう。

５．　**貧困、不平等はともに関係的な概念である**：19 世紀の貧困研究おいては、所得情報を軸にして貧困概念へのアプローチが進められた。そこで貧困は貧困線を確定した上で、貧困線以下の底所得状態として概念が構成され、貧困概念は貧困線所得との関係をもって概念枠を切り取られたといえよう。そして他方の不平等概念においても 社会的厚生関数である不平等測度、そのもっとも多用されているジニ係数においても、均等分割線（対照集団が全くの平等社会として仮定した時のその集団の構成員の所得額）との差の集計をもって浮かびあがるという不平等の構成である。このことは不平等は社会内他者（均等分割線所得者）との比較によって浮かび上がる概念としての構成と言わねばならない。

二つの概念は、その社会の標準的、平均的、主流にある人々などの比較する他者との関係によって概念枠を浮かび上がらせる概念であり、貧困概念では比較する他者とは「貧困線」であり、不平等概念では「均等分割線」であり、貧困測度、不平等測度における「貧困線」「基準値・標準値」「均等分割線」は、その数理表現と考える事ができよう。

貧困概念も、不平等概念も、どちらの概念も対照集団との関係において自らを画する、関係的な、あるいは相対的な概念構成である事が数理的に示されていると言わねばならない。

まとめ

19 世紀初頭に、ブースのロンドン調査、ローントリーのヨークシャー調査が進められ、その数回に及ぶ貧困調査を通して、漠たる貧困概念に対して、一定の所得を貧困線として設定した上で、それ以下の所得層を貧困者と見做す、貧困概念が提示されていった。

やがて第二次大戦の戦後復興なった 1970 年代になって、生物的生存を果たせない貧困、絶対的貧困は克服されようとしても、その社会の平均的なライフスタイルを営めないほどの低所得状態も貧困であるとする、相対的貧困概念が提示されて定着を見ている。この相対的貧困の貧困線はその社会の平均的な水準を下回る一定のラインとして設定されている。双方の貧困は、ともに社会の低所得問題といえよう。

そして不平等問題は生物的存在でありながら、社会という「箍」の中で生きる人間において、自らの生命と種の継続を求め合う生活要求において、その生きる社会集団内の互酬的社会関係性を求めつつ、そのずれ込み、あるいは社会文化的な互酬的要求への窮乏としての概念と考えられよう。生物的存在でありながら、同時に社会文化的な生活を営む人間において、差異を認める人間存在であるが故の、社会集団内での互酬性への要求、その要求の欠乏状態

集合を不平等問題として捉える事ができよう。

言い換えれば、不平等問題は、人間存在の社会文化状態への地質学的時間経過の中を通して引き続いている移行過程、その中で社会文化的要求の拡大を受けて、その社会文化的な生活ニーズ、窮乏の社会的なありよう、その偏り、劣勢の構造についてを、概念化していると考える事ができよう。

貧困と不平等は、貧困を主にして眺めれば、所得不平等の極まった状態が貧困であり、不平等を主にして考えれば、過酷な所得不平等が貧困として概念付けられており、互いに互いを抱え合った構造がイメージされる。

貧困概念と不平等問題は互いに互いを抱き合ってイメージされる、重なり合いながら、その重なり合いの変化を伴いつつの社会状態として、双方は柔らかい順位付けによってしか順位づけられないところの、**重なり合いを有する二つの隣接概念であろうと考えられる。2022/0606**

―貧困の三角形―社会科学の概念－より抜粋

1aboutconcept.pdf (mirai21canalnew.com)

社会科学的な概念は、その概念自体において概念を緻密に積み重ねて完結できるというよりは、むしろ他概念との関係において概念の輪郭、その構造、内容が顕かにされていくのではないだろうか。神話論理の解明は他種族の神話との比較対照によって換喩、暗喩関 係が顕かにされ、神話の意味する事が顕かにされると言う分析手法が採られている。

その概念の肉付きの具合、あるいは背骨さえもが、他の概念との関係によって、対比や、差異を通してより顕かにされていくのではないだろうか。特にルネッサンス以降、プロテスタンティズム興隆以降に巻き起こった自由、人権、平等などの抽象概念にあっては、社会的存在としての他者（のありよう）、それとの相対する関係を通した時に、その外延、構成が明確化さ れうるのではないだろうか。

人権なども時代とともに新しい人権が構成されている。さまざまな他者の人権や自由との関係、隣接概念（人権、抑圧、平等など）との関係からその外延、社会的意味が、顕か にされると言う事なのではないだろうか。